

英語の Mirativity : get 受動文の考察*

志 澤 剛

Mirativity in English : A Case Study of *Get*-Passives

Takashi SHIZAWA

1. はじめに

2012年の *Linguistic Typology* 16における特集をはじめとし、近年、類型論の分野において mirativity という概念に注目が集まっている。mirativity とは、概略、伝達する情報が話し手・聞き手にとって「意外」なものであること、およびその意外性から生じる「驚き」を表す意味カテゴリーであり (cf. DeLancey (1997, 2001)、Aikhenvald (2012) 他)、情報源を明示する evidentiality (証拠性) と同様に、「当該情報が話し手 (聞き手) の知識構造においてどう位置付けされているか」を反映する文法的標示である。

DeLancey (1997) によるチベット語方言の研究以降、mirativity は膠着語を中心に分析されてきた。一方で、英語における mirativity については、いくつかの文献でその表現手段について簡単に触れられているものの (DeLancey (2001)、Peterson (2013)、Ikarashi (2015) 他)、詳しい体系についてはまだ不明な点が多い。

そこで、本稿では、将来の研究への足掛かりとして、英語において mirativity の表出を担っていると思われる表現形式として、get 受動文 (例：He got killed in an accident.) を取り上げ、その基本的な特徴について考察する。

2. mirativity について

get 受動文について詳しく見る前に、ここで mirativity という意味カテゴリーについてごく簡単に見ておこう。繰り返しになるが、mirativity は、話し手・聞き手の命題内容に対する「意外性」や「驚き」をマークするものである。Aikhenvald (2012 : 437) によると、以下のような意味が mirativity の担う意味範疇に入るといふ。¹

- (1) a. sudden discovery, sudden revelation or realization (a) by the speaker, (b) by the audience (or addressee), or (c) by the main character ;
b. surprise (a) of the speaker, (b) of the audience (or addressee), or (c) of the main character ;

* 本稿の執筆にあたり、Rodney Biddle 先生にはインフォーマントとしてご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。当然、本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任である。

1 (1)に挙げられた意味の全てが等しく mirativity の表出を担う言語手段で具現化されるわけではない。どの範囲まで具現されるか、或いはどの程度 mirativity が文法に組み込まれているかについては、言語ごとに様々なバリエーションが存在する (cf. DeLancey (1997 : 49))。

- c. unprepared mind (a) of the speaker, (b) of the audience (or addressee), or (c) of the main character ;
- d. counterexpectation (a) to the speaker, (b) to the audience (or addressee), or (c) to the main character ;
- e. information new (a) to the speaker, (b) to the audience (or addressee), or (c) to the main character.

ここで、Tibeto-Burman 言語における具体例を見てみよう。(2)は Magar 語の例である。

- (2) boi-e chitua-ke ŋap-o le
 father-ERG leopard-DAT shoot-NMLZ IMPF.MIR
 [I realise to my surprise that :] 'Father shot the leopard'
 (Aikhenvald (2012 : 441))

この例において mirativity を担っているのは名詞化接辞の *o* と文法化されたコピュラである *le* である。これらの文法的マーカーの使用により、伝達対象となる命題（父親がヒョウを撃ったこと）が話し手にとって、予想外であった、予期していなかったなど、広い意味での「驚くべき情報」であることを示している。

次の文は、Lhasa 語の例である。

- (3) nga-r dngul tog=tsam 'dug
 I-Loc money some exist
 'I have some money!' (quite to my surprise)
 (DeLancy (1997 : 44))

ここでは、存在を表すコピュラである 'dug が mirativity のマーカーとして機能している。DeLancy (1997) によれば、(3)が用いられるのは、「話し手がポケットに手を入れたら、思いがけずお金を見つけた」ことを伝える場合であるという。

3. get 受動文 : mirativity の観点からの考察

前節で繰り返し述べたように、mirativity とは、当該情報に対する話し手の「驚き」、「予想外」を表示する文法的な手段である。後述するように、英語にも mirativity を表出する手段はいくつか存在することが指摘されている。本稿では、get 受動文もその一つであるという仮説を提示し、例証していく。

3.1. get 受動文について

get 受動文とは、通常は「be+動詞の過去分詞形」で具現される英語の受動文 (be 受動文) において、be 動詞の代わりに get が用いられる形式のことである。² 次のエピソードにおいて明確に示されているように、be 受動文と get 受動文には使用上の差異が存在する。

- (4) In recent conversation, an acquaintance of mine described being escorted out of a restaurant and expressed her shock and displeasure at the situation. She remarked: “I was thrown out!” Immediately after, she reiterated: “I got thrown out!”
(Stewart (2013: 13))

両者の違いについては、統語論、意味論、語用論といった枠組みの違いを問わず、様々な指摘がなされているが、Huddleston and Pullum (2002: 1442) が以下のように集約している。

- (5) a. *Get*-passives tend to be avoided in formal style.
b. *Get*-passives are found only with dynamic verbs.
c. *Get*-passives are more conducive to an agentive interpretation of the subject.
d. *Get*-passives are characteristically used in clauses involving adversity or benefit.

しかしながら、これらの指標のみでは(4)における get 受動文と be 受動文の違いを十分に説明できるとは言えない。例えば、(5d)は両者の違いを上手く捉えていると言えるかもしれないが、(5c)は ‘I got thrown out.’ の解釈には不要であると思われる。では、両者の区別を正確に捉えるには、どのような視点を取り入れれば良いだろうか。

3.2. mirative strategy としての get 受動文

最終的にその疑問に答えるための一歩として、まずは get 受動文が用いられる典型的な文脈をいくつか考察してみよう。

- (6) I couldn’t believe it. There were eleven people in that van, and my son was the only one who got killed. (P. E. Flint, *I Look Back and Wonder How I Got Over*)

ここで着目したいのは、第一文目の “I couldn’t believe it.” から分かるように、この語り手が「息子が亡くなってしまったこと」、もっと言えば、「息子が唯一の死者であったこと」を受け入れられないということである。さらに、次の例を見てみよう。

- (7) “I couldn’t help it, Mickie. My car got stolen.”
“Your car got stolen?” She gave an exasperated sigh. “There’s hardly anybody left in the city. How the hell did your car get stolen?”

2 ただし、「get+過去分詞」のうち、過去分詞が形容詞として定着しているもの (e.g. get excited) や、「get+oneself+過去分詞」でパラフレーズ可能な再帰的意味を持つもの (e.g. get shaved=get oneself shaved) については受動文とはみなさず (cf. Mitkovska and Buzarovska (2011))、考察対象から除外する。

“I parked it at Jabril’s muffler shop while we were up at the hospital. Somebody must have needed a way out of town.” (K. Abel, *Down in the Flood*)

まず、最初の話し手の発話に使用されている get 受動文に着目してみよう。通常、誰でも「自分の車が盗まれたこと」を当たり前の知識として有しているということはあり得ない。よって、この get 受動文はその伝達内容が話し手にとって予期せざることであったことを示している。さらに、この受動文が自分の車が盗まれたことを「聞き手にとって予想外の情報」として提示していることにも注意されたい。実際、それを受けた聞き手の反応からもそのことは明らかであろう。

ここまで見た2つの get 受動文の例から、get 受動文は、話し手／聞き手のいずれか(または両者)にとって「予想外」の「驚くべき」情報を担っているということが推察される。次の2つの例は、その推測の妥当性を強く裏付けるものである。

- (8) What was the consequence? Why, that he got loved by everyone in spite of his intolerance; [...]
(L. Hunt, *The Wishing-cap Papers*)
- (9) It looked as if I would never get a chance to wear my new evening dress; nobody asked me out anywhere for weeks; but just as I was beginning to give up hope, I got invited to this dinner.
(Hatcher (1949: 440-441))

(8)で特に注目すべきは、間投詞 why の生起である。よく知られているように、間投詞の why には、後続する発話内容が「意外な発見・認識」であることを表す用法がある。この例では、why との共起によって、後続する文で述べられている事態(ここでは、「彼がその偏狭にも関わらず皆に愛された」こと)を「意外な発見」として提示していることが一層鮮明になっているのである。(9)では、その文脈の流れに着目されたい。「何週間も誰にも誘ってもらえず、新しいパーティドレスを着る機会がないのではないかと諦めていたところに、ディナーに招かれた」という内容である。まさに、話し手にとって「このディナーに招かれた」という出来事は、その誘いを受けた時点では「思いもよらなかったこと」であり「驚き」なのである。

以上のように、get 受動文の使用には一定の傾向があることが伺える。少なくとも上で見た3つの例に共通しているのは、「get 受動文によって描写されている事態が話し手・聞き手にとって『予想外のこと』、『驚くべきこと』である」ということである。³ この観察から get 受動文の使用について仮説を導くと、以下ようになる。

- (10) 受動文における get の使用は、発話内容に対する話し手・聞き手の驚きをマークする mirativity の表れである。

3 類似の指摘をしている先行研究に Swan (1980) がある。

(i) [get-passive is used] when we are talking about things that are done suddenly, unexpectedly or by accident, [...]

しかしながら、Swan はこれ以上の詳しい考察はしていない。また、この記述から判断する限り、Swan は描写対象となる出来事の発生そのものの突発性・偶発性を問題としているが、mirativity は、「発話によって伝達される情報が話し手・聞き手の知識体系の中でどのように位置づけられているのか」を問題としているという違いがあることに留意されたい。

次節では、この仮説の妥当性を作例と実例によって検証する。

4. 仮説の検証

仮説(10)が正しいものとするれば、「当該情報に対する話し手・聞き手の驚きを喚起しない文脈では、get 受動文よりも be 受動文の方がより適切となる」という予測が導き出される。以下のペアの容認性の差が示すように、その予測は妥当なものと言える。

- (11) a. Not surprisingly, he was killed.
 b. # Not surprisingly, he got killed.
- (12) a. As expected, he was promoted.
 b. # As expected, he got promoted.

(11)、(12)の例では、not surprisingly、as expected という表現が生起し、それぞれ後続の発話内容が「驚くべきことではない」ということを意味している。インフォーマントによれば、このような環境では get 受動文よりも be 受動文の方が自然であるという。

また、次のペアの容認性の差も、(10)の仮説の妥当性を示すものである。

- (13) a. If you don't know, Tom got arrested.
 b. # As you know, Tom got arrested.

(13a)はいわゆる「発話行為条件文 (speech-act conditional)」(Sweetser (1990))であり、その解釈は「君が知らないなら教えてあげられるけれども、トムが逮捕されたんだ」となる。ここでは if 節が一種の前置き表現として機能しており、主節の伝達内容が聞き手にとって未知の情報であることを前提とした発話であることを示している。つまり、主節の発話の内容は「聞き手が知らない(と話し手が思っている)情報」、すなわち聞き手にとっての「新規獲得情報(と話し手が思っているもの)」であり、その意味で聞き手にとっては驚くべきもの(と話し手が想定するもの)となっており、ゆえに get 受動文が問題なく容認される。一方(13b)では、前置き表現として、as you know が用いられている。これは、話し手が主節の伝達内容を「聞き手にとって既知の情報」と想定していることを明示している。よって、聞き手に驚きを喚起する内容とは言えず、get 受動文は容認されにくいと判断される。

同様のことは、次の対話文の例にも当てはまる。

- (14) A : You look upset. What's happened?
 B : Well, John {got/# was} arrested.

この環境では「John が逮捕された」という伝達内容は、話し手Aにとっての「新規獲得情報」であり、その意味で話し手Aにとって驚くべきもの(と、話し手Bが想定するもの)となっており、ゆえに get 受動文の方が be 受動文よりも容認性が高いと判断されるのである。

以上のように、(10)の仮説が予測する通り、get 受動文は「予想通りの出来事」、「話し手・聞き手の間で共有された知識」など、「驚き」を喚起しない環境では容認度が低いのである。このように考えると、上で見た(4)における be 受動文と、get 受動文の使い分けの謎も見えてくる。ここで、mir-

ativity という観点から (4) をもう一度見てみよう。

- (4) In recent conversation, an acquaintance of mine described being escorted out of a restaurant and expressed her shock and displeasure at the situation. She remarked: “I was thrown out!” Immediately after, she reiterated: “I got thrown out!”
(Stewart (2013 : 13))

ここで she が get 受動文を用いて表出しているのは、レストランから連れ出された際の動揺と不快感である。そもそも「レストランから連れ出されること」が、既存の定着した知識であれば、それに対して動揺し、不快感を覚えることは(さほど)ないはずである。「レストランから連れ出されること」が話し手の予期しなかった、或いは期待に反した出来事であるから、動揺し、不快感を覚えるのである。よって、この文脈では、be 受動文に比べて、mirativity を表出する get 受動文の方が適当なのである。

一見すると、次のような例は仮説(10)に対する反例のように思われる。

- (15) As usual I got stuck halfway and had to begin again.

仮説(10)の妥当性に疑問を投げかける反論として考えられるのは、以下のようなものである。(15)では、前置き表現として as usual が生起し、「いつものように」となるわけであるから、後続する文の内容は話し手・聞き手にとって「既知のこと」、「予測の範囲内のこと」、「当然のこと」になるはずであり、ゆえに仮説(10)は妥当ではない、という論理である。⁴

しかしながら、「いつものように起こること」だからといって必ずしも「当然のこと」とは限らない。(15)の例が実際に用いられている文脈を観察してみよう。⁵

- (16) These all went fine until I attempt to play some major scales in contrary motion. As usual I got stuck halfway and had to begin again. When I got stuck for a third time I gave up and sat there striking random notes. This reminded me that I ought to find some proper pieces of music to try.
(M. Mills, *A Cruel Bird Came to the Nest and Looked in*)

最後の文 “I ought to find some proper pieces of music to try” から読み取れるように、下線部(および、次の文に生起する get 受動文)が「話し手の希望していない事態」という、一種の counter-expectation を表していることが読み取れる (cf. (1d))。その意味で、下線部は mirativity を表出していると言える。

さらに、次の例では、unexpectedly と as usual が共起していることに着目されたい。

- (17) Tonight’s addition to Product of the India of Mahatma Gandhi was supposed to be the five books by Gandhi given to me by my friends from India and that we are

4 Swan (1980) の記述(脚注3を参照)に対する Hübler (1998 : 164) の反論も同様の論理である。

5 以下、例文中の下線はすべて筆者によるものである。

offering through Peace Action in Milwaukee. However, unexpectedly, as usual, I got sidetracked with a few friends in need and talking too much. Thus I did not take the pictures of the book covers for the posting.

(<http://www.nonviolentworm.org/DiaryOfAWorm/20090715-NatureOverWords>)

「思いがけず、(しかし)いつものごとく脇道に逸れて、ブログにアップする本の表紙の写真を撮らなかった」という文脈である。「自分にはそんなつもりがなかったのに、結果としていつものようになってしまった」ということである。よって、as usual が生起していても下線部を mirativity 表現として解釈することに何の矛盾もないのである。

get 受動文が mirativity を担っていることは次の2つの文脈の対比からも一層強く裏付けられる。

- (18) a. For the next few days he stayed with friends and managed to escape detection ; the third night he went back to his family ; and the next morning early he was arrested in his home. (Hatcher (1949 : 239))
- b. For a few days he stayed with friends and managed to escape detection. But then he wanted to go back to his family ; I warned him, I implored him not to do so, but he wouldn't listen to me. He went back and promptly got arrested. (Hübler (1998 : 171))

Hatcher (1949) によれば、(18a)の文脈で下線部に get 受動文を用いることは難しい (“difficult to imagine”) という。しかしながら、Hübler (1998) が(18a)の文脈をわずかに変えた(18b)では、get 受動文が問題なく容認されるようになる。Hübler は、その理由を “The preceding context of the original example [(18a)] establishes a perspective aptly characterized by Hatcher as “flow of events”. This, however, is not compatible with the strong focus of the subject as effected by the *get*-passive.” としているが、本稿の枠組みで言えば、「(18b)は mirative information を伝える文脈としてふさわしいものとなっているから」ということになる。具体的に説明しよう。(18b)で Hübler が新たに付け加えたのは、“I warned him, I implored him not to do so, but he wouldn't listen to me.” という一文である。この文によって、語り手にとって「彼が逮捕される」という事態が、(16)の事例と同様に、「話し手の希望していない事態」という counterexpectation を表していることが明確に読み取れる文脈になるのである(語彙レベルでも、「驚き」を明示する promptly が使用されている点にも着目されたい)。

5. 更なる証拠：創造動詞・状態動詞の get 受動化

(5b)にあるように、get 受動文による受動化ができる動詞は動的動詞に限られ、特に創造動詞や状態動詞では不可能であると指摘されている。

(19) * Our house got built in 1827. (Swan (1980 : 268))

(20) # It got believed that that the letter was a forgery.
(Huddleston and Pullum (2002 : 1442))

しかしながら、実際には、build や believe の get 受動文が使われている例が存在する。⁶

- (21) a. The house got built, most of the mistakes got fixed, and the builder made some concessions before we got to the closing table.
 (http://www.thewoodedlot.com/archives/welcome-to-the-wooded-lot/)
- b. After a lot of pushing in commercials, the claim of Zotz, the miracle detergent, finally got believed. (Lakoff (1971 : 157))

ここにも、mirativity が関与していると本稿では考えたい。まずは作例で確認してみよう。次の3つの例の容認性の差に注目されたい。

- (22) a. * Our house got built in 1827. (= (19))
 b. ?? Our house got built on schedule.
 c. Our house got built ahead of schedule.

非文として判断される(22a)であるが、副詞を別の表現にすることにより、容認性が向上するのである。特に、(22b)と(22c)の差に注目すると、“on schedule”は「予定通り」の意であるから、特別な文脈のない状態では、何の surprise も counterexpectation も想起しにくいから、“ahead of schedule”は「予定より早く」の意であるから、特別な文脈がなくとも、話し手或いは聞き手の surprise や counterexpectation が想起しやすいことが伺える。この推測が正しければ、“on schedule”が surprise や counterexpectation を想起させるような文脈では、(22b)も容認されることが予測される。事実、その予測は妥当なものである。

- (23) In spite of the accident, our house got built on schedule.

「不測の出来事があったにも関わらず」という文言の付加により、“our house got built on schedule.”という事態の意外性が際立つようになると、問題なく容認されるのである。

更なる確証を得るため、上で実例として挙げた(21a)が実際に使用されている文脈を確認してみよう。

- (24) We built that house from afar, and it was a rather stressful experience that I don't wish to repeat. Various details got glossed over and a number of mistakes were made. In retrospect, this wasn't all that surprising given the builder's assembly line approach and our distance from the build site. Nonetheless, we survived. The house got built, most of the mistakes got fixed, and the builder made some concessions before we got to the closing table. We bought the house in 2002, moved in, and loved living there for four years.

6 Croft (1990 : 57) にも以下の例がある。

(i) The cabin got built in three months.

(24)の第1パラグラフでは、「遠く離れた地に家を建てることの難しさ」が語られている。その内容を受けて、第2パラグラフは nevertheless で始まる文で導入されている。この語は前述の内容が事実であることを認めながらそれと矛盾することを導入する。したがって、その文に後続する “The house got built…” は意外性のある出来事として解釈されることとなるのである。

状態動詞の場合にも同様のことが言える。

(25) It suddenly got known, as did Sunnyside, which is really quite shady.

(*New York Magazine*, March 30, 1970)

(26) I grab my phone. It shakes and squeaks and buzzes and toots out all these gone calls at me, all these messages and mentions and texts. I skim down and it's not good. I have suddenly got hated like a ferocious new disease. I take a peek at Twitter and I can't even tell you how famous I am, I have no way of measuring how big my name is. (J. Johnson, *Sinker*)

この2つの例では、“quickly and unexpectedly” という語義を持つ suddenly が生起している。その生起により、「そのことが知られる」、「私が憎まれる」という出来事が、話し手にとって「意外である」とか、「驚きである」ということが明示されているのである。

大規模コーパスである BNC を用いて検索しても、(24)-(26)のような例はヒットしない。この事実を踏まえれば、創造動詞や状態動詞の get 受動文が対応する be 受動文に比べて遥かに容認されにくい(少なくとも、使用に大きな制限がある)のは確かなようである。しかしながら、mirative information を伝達していることがはっきりと読み取れる文脈では容認性が向上するのまた事実なのである。

6. 動機づけ

では、mirativity の表出を担う言語表現としての get 受動文を動機付ける諸要因について簡潔に考察しよう。ここでは、類型論的視点と意味論的視点から語彙項目 get に着目したい。

6.1. 類型論的視点

まず初めに、類型論的視点から get 受動文において get を使用することの意味合いを考えてみよう。Aikhenvald (2012) によれば、様々な言語において、mirativity の表出を担う構文には、be 動詞をはじめとするコピュラが関与しているという。⁷

(27) […] complex constructions with mirative meaning involve the verb ‘be’ or a grammaticalized copula […], or the verb ‘become’, and ‘discover’[…].

(Aikhenvald (2012 : 445))

そして、諸説あるにせよ、おおよそ一致している見解として、歴史的に get 受動文における get は起

7 ここで言う「構文」は一般的な「構造体としての言語表現」のことであり、いわゆる構文文法 (Goldberg (1995)) 的な意味での構文のことではない。

動動詞 (inchoative verb) から発達した「文法化されたコピュラ (grammaticalized copula)」であると言われている (cf. Gronemeyer (1999), Fleisher (2006))。すると、コピュラである get が mirativity の表出を担うことは、英語の get に固有の特殊な現象ではなく、類型論的に極めて一般的なものであるということになる。

6.2. 意味論的視点

では、次に意味論的視点から見てみよう。上で触れたように、get は「文法化されたコピュラ」である。そこで、get のコピュラとしての辞書的な意味を確認すると、次のように説明されている。

(28) to reach a particular state or condition (LDOCE)

つまり、コピュラとしての get は主語の変化を表すことが分かる。本稿では、この「主語の状態変化」から mirative meaning が生まれたものと考え、次の仮説を立てる。

(29) get 受け身文は、主語の状態変化に焦点を当てると同時に、主語に対する話し手／聞き手の知識の変化を前景化する。

この仮説は、Sweetser (1990) のモダリティや文の接続の多義性に対するアプローチに着想を得ている。つまり、get 受動文の意味に「内容領域 (=現象描写のレベル) から認識領域 (=話し手の認識世界描写のレベル) への拡張」を認めるのである。具体的に説明しよう。

(30) Wow, he got married!

この文は、現象描写としては、「主語 he の指示対象が未婚の状態から誰かと婚姻関係にある状態へ変化した」ことを表している。同時に、その知識を得ることで話し手の主語 he の指示対象に対するこれまでの認識も、未婚から既婚へと変化するようになる。これを簡潔に図式化すると以下のようになる。

(31) 内容領域 :	unmarried	to	married	(主語の状態変化)
	↓		↓	
認識領域 :	old knowledge	to	new knowledge	(主語に関する知識の変化)

つまり、get の使用により、「知識のアップデート」がなされたことを明示的に標示することになるのである。そして、get の使用が「話し手の認識の変化」を表しうる理由は、get には “to understand” の解釈となる認識動詞としての用法があり、get と認識という概念の親和性が高いためであろう。

(32) I fully got what Lisa had been trying to tell me that day.
(C. Marinelli, *Putting Alice Back Together*)

以上のように、get 受動文が mirativity の表出を担うのは、類型論的、意味論的に動機付けされた現象であると言える。

7. 結 語

以上、本稿では get 受動文が mirativity の表出を担う言語表現であることを見た。なお、本稿では議論が煩雑になることを避けるために詳しく触れなかったが、先行研究において get 受動文が一種の感情表現（「モダリティ表現」とする研究もある）として使用されることが指摘されている（cf. Hübler (1998)、岩澤 (2001)、田村 (2008) 他）。個々の先行研究に対する批判的検討は別の機会に譲るが、この現象も get 受動文が mirativity を担うと仮定すれば、その帰結として導くことができる。伝達情報が話し手・聞き手にとって(1)にある広義の意味での「驚くべきこと」なのであるから、発話時点における話し手の感情が反映されるのはごく当然のことであろう。

最後に、英語における mirativity 研究について簡潔に触れておこう。冒頭で述べたように、英語における mirativity については、まとまった先行研究が存在せず、不明な点が多い。しかしながら、DeLancy (1997) をはじめ、いくつか重要な指摘をしている文献がある。例えば、DeLancy (1997: 48-49) が英語における mirativity 表現の 1 つとして取り上げているのは、次のような条件節である。

- (33) A : Are you going to be at the meeting?
 B : No, I think I'll skip it.
 A : I think John is hoping you'll be there—he'll be there for sure.
 B : Oh-well, if John is going, I'll go too.

文脈から推察できるように、(33)における下線部の条件節は、話し手Bの新規獲得情報を表している（cf. Akatsuka (1985)）。その意味で当該情報は話し手Bにとって予期していなかったものであり、条件標識の if が mirativity を標示していると言える（(1d)に相当する）。⁸

また、Ikarashi (2015) は、Akmajian (1984) で言うところの Mad Magazine 構文を mirativity の表出を担う表現として考察している。以下に例示するように、Mad Magazine (MM) 構文は、時制要素を欠くために主動詞が原形で生起し、主語位置に代名詞が生起する場合には対格で具現する、といった形式的特徴を持つ。

- (34) A : I hear that John may wear a tuxedo to the ball…
 B : Him wear a tuxedo?! He doesn't even own a clean shirt.
 (Akmajian (1984: 3) [Ikarashi (2015: 117) より引用])

(34)では、話し手Aが話し手Bに対し、Johnがタキシードを着る可能性について情報を与えている。そして、話し手Bはその情報に対し驚きと不信をもって反応しているのである。

この他にも、現在のところ、文副詞の actually や in fact が mirative information を導くマーカーとして働いているという見込みがある。また、Gary (1976) の場所句倒置文の考察は、当該構文が mirativity を担っていることを示唆している。つまり、英語の mirativity には、語彙のレベル(get)、構文レベル (MM 構文、場所句倒置文) で具現するものと、if や actually のように、命題の外の談

8 なお、当該条件節を日本語に翻訳する場合、条件表現は「なら」よりも「のなら」の方が適切である。これは、名詞化接辞「の」を日本語における mirativity のマーカーとする Ikarashi (2015) の観察に合致する。

話的要素が導くものというように、複数の具現パターンがあるようだが、詳しい考察は今後の研究課題としたい。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra. Y. (2012) "The Essence of Mirativity," *Linguistic Typology* 16, 435-485.
- Akatsuka, Noriko (1985) "Conditionals and the Epistemic Scale," *Language* 61, 625-639.
- Akmajian, Adrian (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit," *Natural Language & Linguistic Theory* 2, 1-23.
- Croft, William (1990) "Possible Verbs and the Structure of Events," *Meanings and Prototypes*, ed. by S. Tsohatzidis, 48-73, Routledge, London.
- DeLancy, Scott (1997) "Mirativity: The Grammatical Marking of Unexpected Information," *Linguistic Typology* 1, 33-52.
- DeLancy, Scott (2001) "The Mirative and Evidentiality," *Journal of Pragmatics* 33, 369-382.
- Fleisher, Nicholas (2006) "The Origin of Passive *get*," *English Language and Linguistics* 10, 225-252.
- Gary, Norman (1976) "A Discourse Analysis of Certain Root Transformations in English," Indiana University Linguistic Club. (安井稔(編)『海外英語学論叢』1978, 40-68, 英潮社, 東京.)
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Gronemeyer, Claire (1999) "On deriving Complex Polysemy: The Grammaticalization of *Get*," *English Language and Linguistics* 3, 1-39.
- Hatcher, A. Granville (1949) "To *get/be* invited," *Modern Language Notes* 64, 433-446.
- Hübler, Axel (1998) *The Expressivity of Grammar: Grammatical Devices Expressing Emotion across Time*, Mouton de Gruyter, Berlin, NY.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Ikarashi, Keita (2015) *A Functional Approach to English Constructions Related to Evidentiality*, Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
- 岩澤勝彦 (2001) 「感情表出としての *get* 受動文と完了概念—意味の拡張と習慣化の間—」中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェイス上巻』257-265, くろしお出版, 東京.
- Lakoff, Robin (1971) "Passive Resistance," *CLS* 7, 149-162.
- Mitkovska, Liljana and Eleni Bužarovska (2011) "An Alternative Analysis of the English Get-Past Participle Constructions: Is Get All That Passive?" *Journal of English Linguistics* XX(X) 1-20.
- Peterson, Tyler (2013) "Rethinking Mirativity: The Expression and Implication of Surprise," ms., University of Toronto [available at: <http://semanticsarchive.net>].
- Stewart, Jessica (2013) "The English Passive and "Get": Expressing Attitude," *Schwa: Language and Linguistics*, 13-24.
- Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 田村敏広 (2008) 「*Get* 受動文のモダリティ的意味について」『英語語法文法研究』第15号, 82-92.